

中部ベトナムにおける草の根レベルの佛教

清福村の事例を中心に

末 成 道 男

Buddhism at Grassroots Level in the Central Vietnam :

The case of Thanh Phước Village

SUENARI Michio

本論は、中部ベトナム佛教の特徴を、教義や教団の側からではなく、地元の側に焦点を当てた人類学的観察を通して明らかにしようとするものである。その結果、ベトナムには、村寺が存在し、その祭壇には非仏教系の神明が多数置かれ、妻帯住持が住むなど、東アジアの中でも日本と多くの共通点を持つ、伝統的特徴が認められる。しかし、1930年代に始まった仏教新興運動も根付いていて、世代交代と共に上記のような伝統は大きな転機を迎えようとしている。しかし、伝統は必ずしも一方的に衰退するのではなく、ときには民族文化重視や市場経済化の影響などと結びつき、部分的な活性化がもたらされている。この複雑な動きを、フエ近郊村落清福における観察から提示したい。

キーワード：草の根仏教、仏教信仰運動、仏教改革運動、村寺、日仏教系神霊祭祀、在家住持の存在

はじめに

本論は、中部ベトナムの仏教の特色を草の根レベル¹⁾ において探るため、フエ市近郊の清福村の事例

1) 草の根レベルの資料提示には、次の2つの意味がある。

ひとつは、ミクロな調査対象を長期にわたって観察することの意味である。本論で扱ったような草の根レベルの定点観測中心の資料は、調査者個人の力のおよぶ範囲に限られるため集落あるいは街の一角といったきわめて限られた特殊な対象を切り取ったものであるため、その代表性が問題にされることが多い。しかし、統計的に有意な標本抽出をおこないアンケート調査を実施しても、背景の異なるものの比較あるいは表面的事象の考察に留まってしまふ。問題の背景を、生活レベルまで遡って把握した一つの調査は、そういった根拠をもたない百、千の調査地の

にもとづき考察したものである。草の根レベルの比較であり、教義や教団組織の体系的な考察よりも、人々の実践している行為のレベルの記述分析が中心となる。そのうちでも、日本その他の東アジアと比較した場合、特徴的に認められる、(1)むらの寺の存在、(2)寺内における非仏教系神霊祭祀、(3)在家住持の存在を挙げ、それらが70年近く前に始まった仏教改革の動きのなかで、どのような動きをみせているかを述べてみたい。

ベトナムにおいて、佛教は民間信仰と混交した形で浸透していった²⁾。そのなかで、寺は、多くの場合亭^{ディン}と共に、村落社会の結合を象徴する建物であり、村における重要な社会的場となった。インドから、中国というフィルターを通した伝えられた佛教は、さらにベトナムにおいて固有の要素を付加し、多様、多元的な様態を示していた。中部、とくにフェを中心とする地域で特徴的なのは、こうした伝統的な混交状態がより多く保持されると共に、それらを佛教教理に従い整理された形で寺の内外を配置し、信仰面でも非仏教的な夾雑物を排し主要な經典を念誦するような改革（「仏教振興運動」と称されている）が、1930年代から市内外の在家および寺院を中心として行われ、農村部まで、その影響が及んでいる点である。すなわちこの運動が、寺だけでなく、信徒の家庭にまで部分的に及んでいるのを見ることが出来る。もちろん、この改革がこの地方全体を一様に改変したわけではなく、村によっては、その影響が比較的弱く、寺の内部においても伝統的な信仰の名残が認められるところもある。清福村は、その一つの顕著な例である。

1. 「村寺」の存在

東アジアでも、寺の「村」との結びつき方が、密接な場合とそれほど緊密ではない場合と、ほとんど関係の無い場合とがある。日本は、村に「村寺」と称してもよいほど、むらの組織と関わりの深い寺が

質疑応答レベルの調査より、問題点を的確に示す可能性を持っている。

今ひとつの問題は、参与観察資料に基づく社会学的研究と記録資料に基づく実証的歴史研究との対比である。ベトナム仏教の由来、変遷を残された記録資料から実証的に復元することは、その歴史を知るために貴重な作業である。しかし、復元には、残された資料の偏りや、文字資料と実態の乖離、使用されている用語の時代的、地域的限界を伴う。古い過去の記録資料について不得手な社会学的手法では、過去の復元作業そのものに貢献する余地は殆どないが、草の根レベルの調査によって、歴史専門家の資料収集、分析、解釈に新たな角度からのヒントを提供し、また文字資料や通説、の実態との乖離を、行動観察から明らかにするという意味で独自の役割を果たしうるのである。

2) ベトナム仏教の歴史については、大西（n.d.p.1）の専門に基づく要を得た概説があるので、以下要約、引用する。

ベトナムの仏教は、中国経由の漢文經典を用い、中国文化の影響を強く受けた大乘仏教、東南アジア経由のパーリ語經典を用いる上座部仏教、新興仏教のホアハオ仏教に分かれる。仏教教理としては、浄土・法華・密教・禪が普及しているが、日本のような寺門組織がないこともあって、宗派としてまとまっておらず、末端ではそれぞれの要素が混じり合った形で認められる。十一世紀に始まる李朝を初め、各王朝では、仏教を認め、儒教官僚の勢力が伸張した時でも、廃仏毀釈のような極端な弾圧は起こらなかった。1945年以降の社会主義政権のもとでは、仏教に対し親和策が取られたものの、長期にわたる抗仏、抗米戦下では、宗教を利用しての国内攪乱への警戒や経済停滞のもとでの物資節約政策のため、北部では仏僧の徴兵や、仏教信仰に関する制限が迷信異端除去の名目で加えられた。こうした制約は、1986年のドイモイ政策の開始以降はじめて緩和された。

存在するのが普通である。一つの村に複数の寺があったり、村の成員が、村外の寺の檀徒であったりするような場合も存在するが、寺は多くの場合、神社と共に、「村」の信仰の中心であると共に「村」の社会的結合をもたらす役割を果たしていた。このような基準からすると韓国や中国では様相を異にする。韓国では、寺がしばしば山の中など村外にあり、村人全員ではなく、ごく一部の者が通い、僧侶と交渉を持つ場合の方が、普通である。また、台湾や中国本土でも、村に寺があって、村人の多くがその寺に参拝し、行事に参加し、日本に近く見える場合もあるが、そのような場合でも、その所属は、個人が主体で、村人が自動的に所属するわけではない。日本の場合には、このような村との結びつきは、江戸時代にキリシタン取り締まりのために採用された檀家制の影響が大きい、それだけではなく、日本の村が地域共同体としての性格を強く持っていることが基盤となっている。

このように中部日越の場合、上記のようなベトナム仏教の基本的類似に加えて、佛教が盛んで、かつ寺の僧が葬儀や忌祭に関わる人が多い点でも、日本と類似している。北部ハノイ近郊村の潮曲では、同じベトナムでも、葬儀は多くの場合、タイクンと称される宗教専門家が儒教的色彩の強い儀礼を行い、僧侶が招かれる場合は少なかった。これに対し、清福では、葬儀のほとんどは、寺の僧侶または、住持を招いて、納棺から埋葬までの儀礼の中心的な役割を果たすとともに、その後の49日や、年忌にもしばしば僧侶、住持を招いて儀礼を行う。

寺の本堂には、仏教系の仏像だけでなく、非仏教系の神像や村を開いた7族の開祖を記した牌位も置かれている。非仏教系の神々のうちには、南海巨族鯨神や奇石夫人など村内に自らの祠を持つものもあるが、それらの冊封は寺に保管されているなど、本寺が村の宗教センターとしての役割を果たしていることを示している。

2. 礼拝対象の多様性

今もうひとつの特色として、旧式の信仰体系を留めている村寺では、本堂にきわめて多彩な神仏像や牌位が安置されており、その数も時に佛教系の仏像を凌ぐほどで場合もある点が挙げられる。

洪福寺は、清福村^{フイアタイ フイアドン}の西牌と東牌のほぼ中間にあって、むらの宗教建造物では、もっとも広い敷地を占め、境内の庭も広く、正門の前の広場を介して川に面している。



写真1 洪福寺正門前を歩く在家筆頭と住持

本堂には、仏教系神仏像として、前最上段の三世佛（弥勒、釈迦、阿弥陀）、その手前中央に弥陀、さらに観音、入り口近くに新しく置かれた千手観音像が配置されている。また、次に述べる玉皇上帝の壇の左右両端に文殊菩薩、普賢菩薩の小画像が置かれている。また、三列目最外側の祭壇の奥に十殿冥王³⁾を祀るとされる無文字の牌位が置かれている。



写真2 本堂正面の祭壇に祀られた仏教系諸像

このように仏教系仏像は中央前面の位置を占め目立っているが、その背後および両脇には非仏教系神像賀取り囲んでいる。正面三世佛の背後最上段に玉皇上帝の大きな像と左右に南曹、北斗の像などが安置されている。



写真3 正面祭壇奥に祀られている玉皇上帝と南曹、北斗像

さらに、正面正壇の右側には、関聖と左右に周倉、関平を、正面正壇の左側には、女神「天衣阿那」神と左右に侍女を祀る。

3) 十殿思想は、インド起源の閻王も入って居るが、本来の仏教教義とは直接関係なく、中国民間信仰と結びついて生まれ、道教にも取り入れられ、日本、ベトナムには、中国経由の仏教の一部として広まった。ここでは、いちおう仏教系に入れておく。

中部ベトナムにおける草の根レベルの佛教（末成）



写真4 聖母（天依阿那）像



写真5 閻聖像

両側の壁際に奥、中、前と3つの祭壇があり、十殿、男女それぞれ八神の名前を書いた牌位、村の7開祖の名前を記した牌位が置かれている。



写真6 向かって右の諸祭壇



写真7 諸男神牌位



写真8 村の七開祖（男）牌位

入り口正面には、最近置かれた千住観音像（sahasrabhuja aaryaavalokitezvara）が祀られている。



- A) 女神：1. 黄火雷風水僊狐狸九尾僊娘之神、2. 中官殿内土徳僊娘、3. 天僊公主紅娘僊女雲庭之神、4. 奇石貞淑加贈堅介夫人之神、5. 天依亜那演妃主玉僊娘之神、6. 水僊殿内水龍神女娘之神、7. 離宮殿内火徳僊娘、8. 僊人在栴処靈応之神
- B) 男神：1. 銀青大夫首合徳才子潘國勢之神、2. 四内顯靈応之神、3. 南海巨族玉鱗尊神、4. 本土赤鱗龍馬援國公尊神、5. 本土城隍國舅天正尊神、6. 神農皇帝百穀祖之神君、7. 靈池水司真宰神石鎮本且、8. 該知參将禄進保満有護之神

◆ 非仏教系諸神への冊封

この壁際にある16位の男女神明のうち、6神明には、阮朝期に皇帝より、その功績により上等神、中等神などに任命する冊封が与えられその地位を公認されている。このうち男性神については、城隍、赤鱗龍馬、南海巨族、関聖の4神に、女性神では、奇石夫人と天依阿那の2神に対し与えられている。そのうち赤鱗龍馬には中等神、南海巨族には上等神、奇石夫人には中等神、天依阿那神には上等神の称号が与えられている。

表1 寺本堂に保管されている冊封

向かって右側に置いてある箱 DSC00324-DSC00381				
城隍	紹治	5.12.26	1844	
赤鱗龍馬	紹治	5.12.26	1844	
南海巨族	紹治	5.11.27	1844	明命21
城隍	紹治	5.12.27	1844	明命21
城隍	嗣徳	3.8.6	1849	
赤鱗龍馬	嗣徳	3.8.6	1849	
南海巨族	嗣徳	3.8.6	1849	
関聖	嗣徳	5.10.17	1851	
関聖	嗣徳	31.11.27	1877	
関聖、城隍、赤鱗、南海	嗣徳	33.11.24	1879	嗣徳31
城隍、赤鱗、南海	同慶	2.7.1	1886	
関聖	同慶	2.7.1	1886	
関聖	啓定	9.7.25	1924	
赤鱗龍馬	啓定	9.7.25	1924	中等神
南海巨族	啓定	9.7.25	1924	上等神
城隍	啓定	9.7.25	1924	
向かって左側に置いてある箱 DSC00324-DSC00381				
奇石夫人	明命	1.7.26	1835	
奇石夫人	紹治	2.11.8	1841	
奇石夫人	紹治	2.10.8	1841	明命21
天依阿那	紹治	5.11.27	1844	上等神
天依阿那	紹治	5.12.26	1844	
奇石夫人	嗣徳	3.8.6	1849	
天依阿那	嗣徳	3.8.6	1849	
天依阿那、奇石夫人	嗣徳	33.11.24	1879	嗣徳31
天依阿那、奇石夫人	同慶	2.7.1	1886	
奇石夫人	成泰	15.11.26	1902	中等神
天依阿那、奇石夫人	維新	3.8.11	1908	
奇石夫人	啓定	9.7.25	1924	中等神

◆ 現在なお旧式配置の残っている“村寺”

清福周辺及び、フェ市郊外の寺には、伝統的な旧式配置を残しているところがある。網羅的調査ではないが、偶々立ち寄った先で旧式配置であった例をまとめると以下の通り。

表2 旧式の神仏像配置の例 (the old style arrangement of altars in “village pagoda”)

◆ 洪福寺（清福）

十殿

北斗 玉皇上帝 南曹

十殿

天衣阿那

弥勒 釈迦 阿弥陀

関聖

諸女神

弥陀

諸男神

七祖女

観音

七祖男ほ

◆ 金蓮寺（清河） 20090409

国

孔子

三世佛

関 聖

王

長

勢至菩薩 勢至菩薩

周倉

関平

生

位

赤馬

◆ 朝山東南寺（朝山東南） 20090419

うしろの堂

聖母

玉皇上帝

関聖

まえの堂

地藏

釈迦

観音

◆ 慧雨寺（金堆）

本堂

媽祖

関羽

◆ 万安寺（芝陵481） 20040724 古風

聖母

三世佛

関聖

玉皇上帝

◆ 隆福寺 20040725

舅

弥勒 釈迦 観音

関聖

姑

◆ 天江寺（褒栄） 20090426

香霊

釈迦

関聖

◆ 法海寺（Con Hen） 20090419

地藏

釈迦

観音

護法

護法

（関聖カラスケース入り）

3. 妻帯住持の存在

中部ベトナムで顕著なのは、村レベルの寺にしばしば、正式の僧侶ではなく、tai gia（在家）、co son mon（山門を模倣するもの）などと称される妻帯住持が居住していて、僧職の住持と同様の役割を果たしていることである。その地位は、子孫に受け継がれる事が多い。これは、日本の寺の場合と比較すると全く違和感はない。しかし、ベトナムでは、僧侶は五戒を厳密に守るのが出家であり、僧侶であるという観念があり、在家出家の区別は明確で出家に対しては聖職者として尊敬の度合いが強い。ただし、このような観念が存在することは、伝統的には佛教を出家僧侶およびその活動のみに狭く限定するものではなかった。かつては、在家住持の活動を認めるような緩やかな佛教のあり方が存在し、多くの儀礼活動が佛教的方式に準じて行われてきた。このことは、中部における仏教が独自性を失い民間信仰や道教の中に埋没したというよりは、むしろ人々の生活の中に広く浸透したことを示すものである。

他方中部では、佛教原理を厳密に解釈し適用しようとする動きも顕著である。フエ市内および周辺の寺を中心とする仏教教会における教理重視の改革運動が、党の迷信異端排除の方向に向かう宗教政策とも合致し、広義の旧仏教信仰を認めない方向に向かっている。その結果、一部では、これまでむらで管理してきた寺を、直接管理下に置き、僧侶を派遣し、正統的な仏教教理にもとづく活動を行っているところもある。なお、引き続きむらの管理下におかれているところでも、寺の名称を認めず、念仏堂の名称をあてたり、別に念仏堂を設け活動をしているところもある。

こうして、しばしば耳にする「フエは、佛教が盛んで人々の生活に強い影響を与えている」という言説は、広い意味の仏教と教理に厳密であろうとする狭い意味での佛教の双方（わかりやすくするため「旧式の仏教」後者を「新式の仏教」と称することにする。ただし、この区別、名称が実際に地元で使用されているわけではない。）において当てはまり、両者は現在において、時には相克しながら人々の信仰を集めている。

◆ 妻帯住持と出家僧侶のちがいがい

妻帯、肉食であるが、他の宗教専門家タイクンと異なり、肉や酒はひかえめである。衣装は、出家僧侶のものに習って着けるが、儀礼主宰者として黄衣をまとう以外は質素な褐色または薄ネズミ色の衣をつける。儀礼活動において、顕著な差異はないが、埋葬前夜の儀礼の最後の法話は行わないなど、修行経験の違いが表れる。また、タイクンとの関係も僧侶のように共に行動することを避けることはない。

◆ 妻帯住持とタイクンとの関係

寺の妻帯僧が主宰する儀礼は、佛教系のもので、供星（星占い）や水府（ひとがたを水神に供え加護を祈る）のような純道教系儀礼や聖母信仰儀礼には主宰者として関わらない。ただし、自らの家庭の行事として、これらの行事をタイクンに依頼することに吝かではない。

儀礼への相互の参加 清福の住持は、あまり他のタイクンと組まないが、褒栄の天江山寺の住持のよう

に、よく組んで儀礼を行っている例もある。

北部の潮曲などでは、寺の住職がタイクンより民間の道教儀礼についても造詣が深く、タイクンが儀礼などについて聞きに行くこともあり、寺の佛教・道教的要素と民間信仰としての道教は排反的と言うより、境界の曖昧な相補関係に有ると言える。

これに対し、中部では、佛教教団の影響力が強く、とくに現代においては、佛教教理に従った祭壇配置を重んじ、旧来の道教的、民間信仰的要素を払拭する傾向が認められる。

4. 疏文⁴⁾にみる草の根仏教のあり方

疏文とは、儀礼の際に各種の神霊に対し読み上げられる公文形式の文書であるが、その中に記されている受け手の神霊は、釈迦を初めとする佛教系、道教系の神明、聖母信仰系の神明、亡霊などに大別される。

◆ 疏文の用途

1) 無事平安を祈る求安、求超、佛（開経）、2) 年間の折々の行事：翁灶、畢年、交承（除夜）、節家（迎春）、供星、開帳、財神、病祈安、還源、占城、先師、3) 墓や家の建築などの際に用いられる謝墓、供土、后土、送木、上梁、各官、4) 葬礼（死後、納棺を済ませ喪服を着用する成服に始まり、朝奠、夕奠、祠堂にゆき祖先に報告する召祖、出棺前の遣奠、埋葬葬列途中の礼、家に戻って刈り祭壇に礼を迎える返哭までの各礼ごとに用いる疏文）、本人の靈魂が冥界から無事にたどり着けるようパスポート、また、供えた冥衣、冥具、紙銭などが他の靈魂に奪われず、本人の靈魂に届くよう証明書、忌祭、5) 聖母道の儀礼に用いられる会同、供聖、水府、外境、本命、婆、姑、姑外、舅、舅外、など、これまで5カ所で購入したものだけでも45種類にのぼる。

◆ 疏文の使用者

主に儀礼の専門家（清福では、洪福寺の在家住持、村内外のタイクンやシャーマン、外来の僧侶）が使用し、たまに個人が、祈安、畢年など一部の疏文を自家で行う儀礼に用いることもある。

◆ 疏文の購入先

これらの疏文は、1) 特定の寺院、2) 寺院近くにある仏具屋、3) 大きな市場、4) 冥具屋などで販売されている。それぞれの場に応じた品揃えをしていて、客種の違いを反映している。また、市の内外から参詣者が集まるデンホンチエンの祭礼などには、沿道で参詣用の疏文が代書を兼ねて売られている。

4) 疏（Sớ）は、厳密には儀礼の際に、上級神に上奏する文書であるが、中級、下級の神霊に供える状（Trạng）、帖（Thiếp）牒（Diệp）などを含む総称として「疏文」の語が当てられことがあり、ここでは広義の用法に従う。

フエ市内の仏教教会本部のある慈曇寺の購買部と旧中華街にある関聖寺という2カ所である。慈曇寺は、正統な仏教の代表的寺院であり、その購買部で売られている疏文は、僧侶の用いる一部の疏文に限られている。葬礼に関する疏文は置いてないが、これらは、道路をへだてた向かいある仏具店に揃えている。この仏具店でもタイクンの疏文を扱っているが、聖母道関係のものは少ない。一方、関聖寺は関羽の名前がついているが華人ではなく、キン族により創建された寺で仏教関係者だけでなく、タイクンや聖母道関係者の使用する疏文をも含めもっとも幅広い品揃えをしているが、葬礼関係のものは置いていない。市場では、全体の数が少ない割に忌祭関係と聖母道関係の比重が高く、葬礼関係のものは無い。

冥具屋は、一般の人々向けの疏文を時期に応じて冥具と共に売っているもので、品揃え、数ともに少ない。

◆ 疏文の種類と教派

これらの疏文は、佛教系神佛にささげるもの、道教系神にささげるもの、聖母信仰に関するものに大別される。そのうち、儀礼を見守るために降臨を乞う「仏」や、無事、平安や快復を祈願する「求安」、無縁仏への施餓鬼の際の「各官」、「孤魂」のように各系で共用される疏文もあり、また、「求安」や「会同」のように、各系の神霊が混じっているものもある。ただし、こうした境界例が存在していても、各系が識別不可能なほどぐちゃぐちゃに混じり合っているのではなく、それぞれの体系を保っていることは、ベトナムの「三教同源」の儀礼活動における相互関係を確認する指標の一つとなりうると考えられる。

◆ 疏文の使用

疏文の使用状況は、実際の信仰活動における儒、佛、道、聖母信仰などの相互関係を明らかにする手がかりになる。

正式の僧侶は、ごく一部の佛教に直接関係するものだけを使用する。ただし、その他の疏文類がどのようなものかを明確に知っている。在家住持は、僧侶よりも広範囲の行事に関わりをもつ。ただし、佛教関係の儀礼が中心となっている。僧侶の中には、解冤儀礼のような密教系の道教儀礼と関連の深いものを実修する者もあり、この場合には、タイクンの専門領域と重なる。

タイクンは、どの系統を得意とするかにもよるが、個々の家庭の葬式、忌祭など仏教系の儀礼だけでなく、呪術的儀礼にも関わるため、きわめて広範囲にわたり使用している。ただし、聖母系については、タイクン自身が神懸かりになることはないので、^{バードン}婆童（聖母系儀礼の専門家）を呼んで共同の儀礼となる。^{バードン}婆童は、ほとんど聖母系の疏文だけを使用している。

民間信仰やベトナム化した道教系の儀礼を行うタイクンは、この村には、現在2人居る。両者とも、村外の妻帯住持から儀礼についての技術、知識を習得し、家伝ではないが、漢字もある程度読める。村人は、必ずしもこの二人に依頼するとは限らず、村外からの依頼者も多い。経済的に余裕の有る場合、フエ市に居住している道士を招く場合もあるが、村のタイクンとは流儀も異なり、手伝うなどの交流は全くない。儀礼内容は、共通するところも多く、村人にとっては、質的な差よりは、より本格的な儀礼

周縁の文化交渉学シリーズ7 フェ地域の歴史と文化

新番号	表書き (行事名称)	漢字訳	慈曇寺	慈曇寺 向興具店	芝陵 開聖寺	東巴 市場	安旧 市場	芝陵 冥具店											
1	Cầu An (2)	求安			20	1			三宝一切諸仏	教主本師釈迦		観世音菩薩	伏魔大帝閻聖 帝君	閻平太子	周倉將軍	三乘上聖	四府萬靈	護法龍天	諸位善神
2	Cầu Siêu	求修	2, 3	3	21				三宝一切諸仏	尊法賢聖	阿弥陀仏	観音	勢至	地藏					
3	Cầu An	求安	1	1	22				十方常住三宝	教主本師釈迦	消災延寿薬師	観世音菩薩	遍法界諸尊菩 薩	道場会上無量 聖賢					
4	Phật	佛 (開經、 疏過)					1		阿弥陀仏			観音	勢至	地藏					
5	Tất Niên	畢年		12				7	三界天曹地府 陽間尊位聖神	今年行遣大王				当境城隍大王	土地福德財神	五方行風行雨 道路神官	侍従部下一切		
6	Giao Thừa	除夜						1	王行禮	行兵之神	曹判官	鬼王使者							
7	Tết nhà	節家			9				九天玄女	魯班、魯卜二 位尊神	家堂香火	福德財神	侍従部下						
8	Cung Sao	供星		5	19	2	4		皇天至尊金闕 玉皇上帝	中天星主北極 紫微大帝	南曹北斗二位 星君	上青天曹十二宮 本命元辰真君	九曜七宿列位 星君	三位三災星君	四方二十八宿 星君	八卦九宮神官	五方隄厄神官	生老病死大小 運限神官	
9	Khai Trương	開帳		13	1				三界天曹地府 陽間尊位聖神	今年行遣大王				当境城隍大王	土地福德財神	五方行風行雨 道路神官	侍従部下一切		
10	Thần Tài	財神			2				三界天曹地府 陽間尊位聖神	前後地主接引 財神						五方行風行雨 道路神官	侍従部下一切		
11	Bệnh Kỳ An	病祈安			4				三界天曹地府 陽間尊位聖神										
12	Hoan Nguyễn	還願	5	14	5	6			三界天曹地府 陽間尊位聖神				五方行風行雨 道路神官	侍従部下一切					
13	Chiêm Thành	占城			6				三界天曹地府 陽間尊位聖神	佔城匡圓尊神			五方行風行雨 道路神官	侍従部下一切					
14	Trang Ông, Tiên Sư (Ông)	rang 翁、 先師	6		7	7		4	三教聖賢歴代 先師	百工技芸列位 祖師	司命灶君		五方土公尊神	吹陶神女進火 郎君	莊院列位				
15	Ông Táo	翁灶			8			6			司命灶君	定國護宅天尊	五方土公尊神	吹陶神女進火 郎君					
16	Ta Mo	謝墓		10	3		5	5	皇天上帝后土	后土九皇帝君	土黃地祇紫英 夫人	太監白馬	太歳至德	当境城隍大王	本處土地正神	五行列位仙女	五方龍脈地墓 神官	八卦九宮神官	四山八向之神
17	Cung Đất	供土		15	18	8	6		丞天效法開皇 后土元君	土黃地祇紫英 夫人	今年行遣大王	太監白馬	太歳至德尊神	当境城隍大王	本處土地里城 正神	坤離土火二位 仙娘	五行列位仙娘	歴代先師尊神	東厨司命灶君
18	Hậu Thổ	后土		8					后土氏之神	雷山土地之神	一切威靈								
19	Đạo Lộ	道路		9					五方開通道路 之神										
20	Tổng Mộc	送木		7	10				九天玄女聖祖 道母元君	魯班、魯卜二 位尊神	第一金莊王	第二社令王	第三安甯王	閻王鑒察掌囚 獄卒大將軍	五方木殃木厄 神官	中間十惡大敗 神官	東方陳地獄主 者鬼之名	西方鄼地獄主 者鬼之名	南方菜地獄主 者鬼之名
21	Thượng Lương	上梁		11					九天玄女	姜大公	魯班、魯卜二 位尊神	本處城隍大王	本處土地正神	五行列位仙娘	歴代先師尊神	東厨司命君	五方土公	本處善神侍従 部下	無祀陰魂
22	Các Quan	各官	7	30	27		7	8	(河沙男女陰 孤魂)	面燃王菩薩									
23	Thành Phục	成服 (遷柩)		26					陰陽使者										
24	Triuê Điện (Thiên Cữu)	朝奠 (遷柩)	8	20					陰陽使者										
25	Tịch Điện (Thiên Cữu)	夕奠 (遷柩)		23					陰陽使者										
26	Triệu Tổ	召祖		25					先靈										
27	Khiển Điện (Thiên Cữu)	遣奠 (遷柩)		21					陰陽使者										
28	Đồ Trung	途中 (遷柩)		22					陰陽使者										
29	Phan Linh	返哭	9	24					(家堂靈床)										
30	Điệp Kỳ	牒忌		18	24	10	9		阿弥陀仏	弥陀									
31	Điệp Tuân	牒旬		17	25				(奉為香燭)					地藏転奏冥王					
32	Thiệp Cấp (Phân Hóa Mình Y)	帖給 (焚貨 冥衣)		19					黄祿院冥衣徐 大將	武林大神	監度大神								
33	Điệp Cấp	牒給			26	11			(香燭)	黄祿院冥衣武 林大神、及監 度大神									
34	(gia đường)	(家堂)			28				(奉為香燭)										
35	Cô (Cô nường)	故? (牒)		27	29	12	10		(奉為香燭)										
36	Hội Đồng	会同		4	11	4	3		観世音菩薩	三官三府公同 四府大帝	天仙地仙水仙 尊位聖母	珠宮下西宮王 母	本命主仙	上天依阿那演 妃	珠宮下管諒山岳 九州黎邁大王	上天岸神天水 府諸位德朝聖女	五行六嗣白兔 金精水晶聖女	三嗣火風神女 仙妃	上天二位狀元 尊翁尊神
37	Cung Thánh	供聖			12				天府天皇大帝	地府祖皇大帝	水府扶桑 (雨 + 丹) 霖大帝	西宮王母本命 主仙	水府主洞庭北 海帝君	水府第三女白玉 臺中水晶公主	水府水乳先妃	水府第四德朝 欽聖聖女	水府五位赤鱗 皇太子龍王	水府三位輔國 狀元先生尊神	本命胎生 歳
38	Thủy Phủ	水府			13	5			天府地府水府 公同高真大帝				洞庭北海帝君	水府第三第四 德朝聖妃	水府乳先妃		水府第五第三 二位尊翁		
39	Ngoại Cảnh	外境			14		8		中天外境外乾 諸位	神嗣諸位	主嗣諸位	德妃	外境乾坤五行六 嗣白兔金精水晶 主靈神德聖妃	三嗣火風神女 聖妃	洲沙外境尊位 聖妃	第四水宮德朝 聖妃	中央戊己土德 聖妃	上天二位尊翁	上天第三監察 尊翁
40	Bồng Mạng (Bà)	本命		6	17	3	2		西宮王母本命 聖德仙妃	本命胎生 歳	金童玉女列位 娘娘	招財接祿列位 娘娘	侍従部下一切						
41	Bà	妃					3		西宮王母本命 聖德仙妃	本命胎生 歳	金童玉女列位 娘娘	招財接祿列位 娘娘	侍従部下一切						
42	Cô Ngoại	姑外					2		聖妃										
43	Cầu Ngoại	舅		9			9		三界天曹地府 陽間尊位聖神	外境外乾舅外	五方行風行雨 道路神官	侍従外境部下 一切威靈							
44	Cầu Ngoại	舅外		16	15				中天外境五行 六嗣諸位聖婆	顯舅尊神外境	五方行風行雨 道路神官	侍従外境部下 一切威靈							
45	Cô Cầu Ngoại	姑舅外			16				中天外境五行 六嗣諸位聖妃	舅姑外境	五方行風行雨 道路神官								

中部ベトナムにおける草の根レベルの佛教（末成）

														南浦寺 青年僧 090419	靈光寺 青年僧 090423	洪福寺 住持 090424	タイクン Thuan 090419	タイクン Chat 090424	婆童 A 090427
														○	○	○	*	×	
														○	○	○	*	○	×
														○	○	○	*	○	○
														○	○	○	*	○	×
														×	×	○	*	*	△
														×	△	△	*	○	×
														×	×	×	*	*	×
														×	×	△	*○	*	
														×	×	△	*	*	△
														×	×	△	*	×	○
														×	×	△	*	*	○
														×	△	△	*	*	×
														×	×	×	*	*	○
														×	×	×	*	*	×
														×	△	×	*	×	×
左青龍右白虎 前朱雀後玄武 神官	守棺守柩之神	五方守墓之神	本処開耕開墾 之神	普及本処内外 遠近男女無祀 之陰靈	孤魂孤墓									×	△	×	*	○	×
五方土公尊神	五方龍神土地 住宅神官	玉泉金井龍王	前開耕後開墾 之神	十八龍宅列位 將軍	土地福德財神	家堂香火列位	五方主隅占跡 之神	門丞戸尉禁忌 列位	普及蚕娘女	主來主落針聖 梅鉛蛋夷迷靈	枯骨伏屍故氣 土木邪精魑魅	内外家園居一切 淹滯男女無祀陰 靈幽魂列位		×	△	○	*○	○	×
														×	×	○	*	*	×
														×	×	△	*	*	×
北方鄧地獄主 者鬼之名	中央枚地獄主 者鬼之名	無常鬼使靈官	金木水火土五 行五氣變為五 鬼作怪神官	普及五方男邪 女鬼	石晶骨氣	金鎚鉄杖斧鉞 刀鎗梃楮鎖刑 伏屍	故氣土木邪精 魑魅魍魎	束縛伽拷打幽 囚凶氣	妖死靡蕩凶神					×	○	△	*	*	△
														×	×	×	*	○	△
														○	○	○	*○	○	○
														×	○	○	*	○	×
														×	△	○	*	○	×
														×	○	○	*	○	×
														×	○	○	*	○	×
														×	○	○	*	○	×
														×	○	○	*	○	×
														○	△	○	*	○	×
														×	△	○	*	○	×
														×	△	○	*○	○	×
														×	△	○	*	○	×
														○	×	○	*	○	×
														×	×	○	*	○	×
上天上岸沖天 水府諸位皇太 子諸位	上天上岸沖天 水府欽差監察十二 朝郡十二姑娘	左右百官文武 臣僚	五雷靈官	五虎大將	侍從部下一切 威靈									×	×	×	*○	○	○
水府鑒察欽差 督兵五方沿路 河伯水官	士卒吏兵一切 水神													×	×	×	*	○	○
水府五方沿路 河伯水官	士卒吏兵一切 水神													×	×	×	*○	○	○
外境七位行差 仙姑	五位行差聖姑	姑紐外境	姑毘外乾	普及侍從部下 一切威靈										×	×	×	*	○	○
														×	×	×	*	○	○
														×	×	×	*	×	○
														×	×	×	*	×	○
														×	×	×	*	×	○
														×	×	×	*	×	○
															×	×	×	*○	×

として意識されている。

聖母道の専門家は、現在自分の祭壇を^{ディエン}供えた殿を持っている1人、および儀礼の時に神懸かりになる1人の2人がいるだけで、依頼者は村外が殆どである。仏教とのつながりは、祭壇上の神仏像や儀礼自体に含まれている仏教的要素以外は、寺や住持、僧侶との関係は殆ど無い。

キリスト教徒は、かつて村外の教会に通っていた家族の子孫が居るだけであり、村の仏教とは全く無関係である。仏子家庭関係者も、タイクンなどに対しては、民族文化保持者として、距離を置きながらも、交流の余地はあるが、教会とは全く異質の存在として断絶がある。

無神論者については、北部の調査においては時々耳にした「唯物論者」だいう発言をこの村の調査において未だ出会っていない。祖先祭祀まで含めた場合、おそらくこの村には居ないであろう。

むらレベルでの「三教同源」は、祖先祭祀を中心とする儒教儀礼（かなり、仏教的要素が入っている）、出家僧侶の主宰する純粹佛教系の儀礼体系、タイクンの主宰するベトナム化した道教儀礼体系、そこから派生した聖母信仰のもとでの儀礼体系のもとで、各儀礼専門家や村人は、個々の要素を識別しながら、自分の経験や好みにしたがって選んだ方式で儀礼を行ったり、依頼したりしている。そのうち、儒教は、孔子が礼拝の対象となることは稀であり、疏文も儒礼専用のものはない。本来は、儒教的な文章であるはずの忌祭の疏文も、仏教的色彩が濃厚になっているのは、ベトナムの特色である。儒礼の影響は、キリスト教を除く各宗派の儀礼の方法などに見られる。すなわち、拝礼などの基本的所作や進香、酒や茶の進献、読疏文といった儀礼の構成、および祖先祭祀の観念や親族関係を本にした行動役割の分担などに表れている。

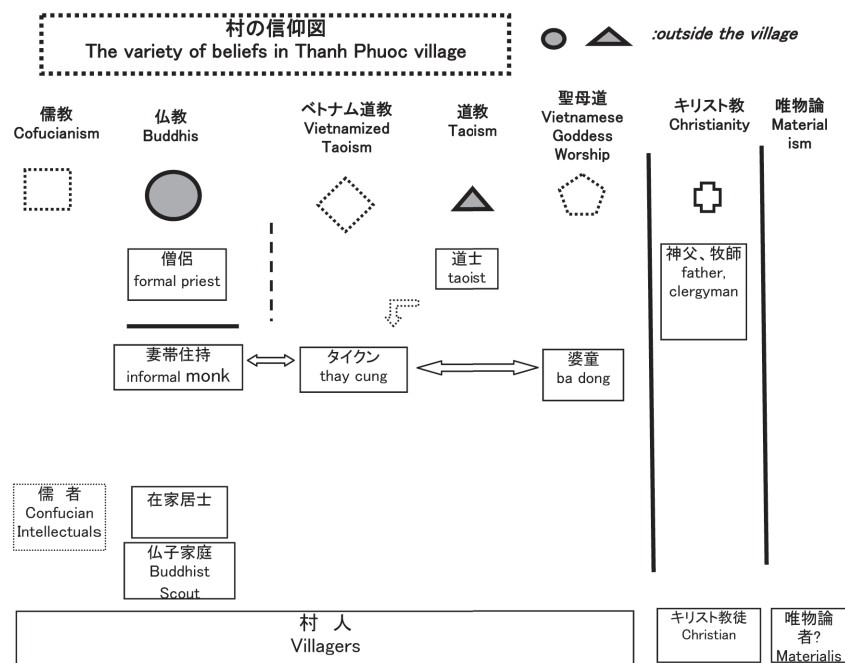


図3 清福村人の信仰

5. 寺での活動のなかでの仏子家庭

清福村の洪福寺は、現在も村の管理下にある。寺の住持は、父から世襲であるが、村に招かれた形になっていて、その権限は大きくない。寺の運営は「護寺会」を中心に行われる。「護寺会」の老人たちの誦経と併行して、「仏子家庭」少年少女団の活動が、活発に行われ、規模の上では老人たちの会の活動を上回る。

◆ 護寺会（Ban hộ tự）

村寺の洪福寺の管理運営組織である護寺会は、村で選ばれた会長、副会長、書記、会計がおかれ、県佛教代表会、承天省佛教代表会に所属している。

住持および「護寺会」メンバー有志の、毎日朝夕のお勤め5時、19時に「大乘無量寿法華経」を誦経する。

他の寺との交流 年4回（2月19日、6月19日、9月19日、12月8日）金山寺、金仙寺に、成人信者が参詣する。

◆ 清福「仏子家庭」

組織は、7才から2才の幼年（oanh vũ）、13才から7才の少年（Thiếu niên）、18才以上の青年（Thanh）の3階梯に分かれ、幼年と少年は、各14人の組に分かれ、それぞれの組に青年の兄長（Huynh Trưởng）が指導者としてついている。

大きな行事としては、4月14日 仏誕礼；7月14日孟蘭盆に、寺の境内に班ごとにテントを張り、ご馳走を用意する。



写真10 清福村「仏子家庭」夜の礼拝



写真11、12 慈曇寺中庭のタム胸像

「仏子家庭」運動を一言で説明するなら、佛教式ボーイスカウト⁵⁾である。1930年代に盛んになった仏教振興運動の一環として医師の1942年に タム（Lê Đình Thám）により創立された。タムは、西洋医学

5) 個々では、男女一緒に行事に参加するので、組織としては男女区別はしない。しかし、ベトナムの男女分離原則を反映して、実際の行動では男女別に固まることが多い。

を学んだが、1930年フエ竹林寺ザク ティエン（GiácTiên）和尚の教えを受け（開悟）仏弟子となった。1932年に安南仏学会が創立し、多くの村社を基本単位とし、念仏堂の建設を進め、大きな念仏堂ごとに分会（Khuôn Hội）を設立した。ここで子弟を集め「仏子家庭」GDPTの基層単位を組織した。

各村社単位の「仏子家庭」では、住持や、護寺会長を顧問役とし、団長、兄長となった青年の指揮指導のもと、男女青少年を佛教の学習、善行を自発的に行い、寺の清掃などの奉仕活動を行う。兄長は、その年限と省「仏子家庭」会で行われる試験により、5段階の資格を認定昇進してゆくなど、年齢階梯的な特徴をもっている。村の「仏子家庭」は、承天省「仏子家庭」を通して、ベトナム「仏子家庭」に組織上、統合されている。



写真12、13 仏子家庭の学習、運動動

◆ 清福の仏子家庭の現状

多くの念仏堂では、旧来の非仏教系の神仏を除いた仏像のみを安置し仏教教理のみに基づく教化がはかられた。清福では、旧来の諸神配置は保存されている。「仏子家庭」活動が、村に残る旧式仏教を直接激しく批判排除することはないとしても、学習されるのは教理にもとづく新式仏教であり、旧式仏教に含まれる伝統的な旧習とは疎遠になってゆく⁶⁾。また、学校などにおいても、「迷信」排斥の気風が一般的になっている。さらに、経済的余裕が出来るに従い、葬式、忌祭などにフエなど外部から僧侶を主宰者とする割合も増加の傾向にあり、この面からも新式仏教の原理的な影響が強くなる。これに対し、タイクンやバードン儀礼は、伝統的な要素の存続に寄与するものであるが、長期的には、若者の関心を惹きつける力が弱いこと減少の傾向にある⁷⁾。

6) しかし、これらの子供が非仏教系神像に全く無知であるわけではない。

7) 若い世代の伝統的慣習への無関心は、清福でも表れており、例えば竈神行事を行うか否かが一つのメルクマールになっている。ただし、財神は、若い層においても人気があり、これとセットになった地翁の祭壇をしつらえる家庭が増えている。したがって、民間信仰全体が世代交代と共に衰微しているわけではない。

◆ 中部に認められる仏教の影響

- 葬礼や忌祭などに仏式の特色が濃く認められる。妻帯住持のほか、寺院の僧侶を招いて行う場合があること。タイクンが行う場合にも、仏教的要素が認められる。
- 精進料理が普及している。料理屋における多様性のほか、一般の家庭でも、月に何日と定めて精進料理を食べることが行われている。
- 犬肉食が、北部に比べ少ない。
- 仏子家庭活動が盛んである。
- 寺で祀る女神が、四府聖母よりは天依阿那。敬氏観音を拝む祭壇がないなど、寺における女神信仰は北部に比べ弱い。

以前の寺では、肉類を供えることもあった。30年前まで関聖の祭壇に豚とアヒル（Vit）2種を供えていた。現在は、肉類を供えることは全く無い。これは、祭壇の多様な構成を反映して、多彩な信仰活動が行われていたが、村においても、佛教に関連する活動に整理されてきたことを物語る。したがって、図に示される多神的な配置は、老人の記憶の中では、かれらを巡る活動と結びつけられ生きたものであったが、その直接体験を持たない世代の人々にとっては、過去のものになろうとしている。特に牌位に漢字で書かれている、神明や一族開祖については、ほとんど過去の記憶を呼び起こす力をもたない。男女16神明のうち、別に自己の祠廟をもつ4神明のほかについては、すでにその存在するここに記載されている名称を除いては口承伝承も含め、忘れ去られている。4神明にしても鯨神については、その祠の由来を知る者も若い世代においては少なくなっている。大切に保存されてきた冊封も、漢字を解する者が殆ど居なくなった現在、文化財として貴重なものであるという認識は共有されていても、具体的内容を少しでも知っていて関心を持つ者は、漢字の読める老人幹部および住持などごく一部にすぎない。したがって、この趨勢に従えば、旧式仏教の多様性は希薄化し、事実上失われ、佛教原理主義的な新式仏教が主流となるであろう。文化の多様性を重要とする考え方が意識的に取り上げられるとすれば、こうした過去の旧式仏教の具体的事物の掘り起こしと国語により、その意味を、解説することが不可欠であろう。その場合も、過去の信仰活動を単に文化的な歴史の知識に留めるのか、あるいは、現在の信仰にも取捨選択して取り入れるのが問題になるであろう。

6. 比較

6.1 日本との対比

村の寺の存在に関しては、ベトナムと日本は、すでに述べたように類似している。しかし、相違も存在する。

寺の祭壇における多神性 明治以前、日本でも神道との融合現象が一部で認められるが、本地垂迹説のように神道神が仏教神の化身であるといった論理的説明のもとに取り入れられたのであり、ベトナムのように、民間信仰の神々を多数寺の祭壇に配置することはなかった。また、仏教、儒教、道教相互の間で純化をめざす原理主義的運動がおこっても、廃仏毀釈のような過激な現象は、ベトナムでは起こらな

かった。

寺の住持に妻帯僧になる点、現象としては、類似しているが、日本の場合は、古くより正式の僧侶が妻帯を認めるようになったという歴史的経緯があって、ベトナムのように両者が明確に区別されているわけではない。

ベトナムの疏文のような文書を儀礼に当たって読み上げることは、日本では神道の祝詞を除いて認められないが、祈る対象の神霊が異なる系統のものをまとめて祈る事はあまりない。俗に個人的願い事で神仏に祈願する時に「神様、仏様…」と祈願の詞を並べることは有っても、それを神社や寺の儀礼において念ずることはない。仏教、神道それぞれにおいて、様々な仏や神に祈りを捧げることはあるが、同じ寺の中で様々な対象に祈ってまわるということは少ない。

ボーイスカウト活動を取り入れる試みはなされてきたものの、ベトナム仏子家庭のように、宗派を超えて青少年層に組織的に働きかける試みはされず、一般人の目にふれることは稀で、盛り上がり欠ける。これは、日本の寺院が江戸時代の檀家制を引き継いでいて、近代化に際してもこうした新たな挑戦をする必要性を強く感じてこなかったためであろう。

6.2 韓国との対比

韓国の場合、寺は、村ごとにあるとは限らず、多くは村から離れた山にあたり、村内にあっても、その信者は村のごく一部で（儒教の観念が強いところでは、信者は殆どが女性）、他村から通ってきたり、村を寺の信者圏の範囲とする発想が無い。

僧侶は、仏教を国教とした高麗朝から、17世紀初め李朝に変わり、朱子学が支配的イデオロギーとなると仏教に対して、寺院財産の没収、僧侶の身分への介入、漢城内の寺院の破壊、僧侶の漢城入城禁止など厳しい制限を加えた。僧侶は、迫害をのがれ山中にこもり参禅修行と教理研究をおこなう「理判僧」と、寺で雑務を行っていた者が民衆のなかに入って求めに応じて儀礼を行った「事判僧」の両極に分化した。後者は、修行もせず、しばしば戒律を破るためシャーマンと同様賤民視されたが、民衆に接しその要求に応えるため民間信仰をも取り入れた。それでも五戒を建前として遵守していたが、日本の植民地統治のもとで日本仏教の布教もなされ、式の本寺、末寺の制度が導入され、妻帯する僧侶も現れた。かれらは、日本統治の終了と共に、李承晩大統領政権期の「仏教浄化運動」の中で、「民族派：比丘派」から、「倭色僧侶」として糾弾され、分かれて「太古宗」を形成し、民間宗教的要素を多く取り入れ農村部を基盤として存続している。⁸⁾

彼らの寺院では、仏陀などの仏像に加え、七星閣、山神閣、冥府殿のような道教や民間信仰系の神霊を祀る場合が、とくに太古宗系の小寺院において多く認められる。また、菩薩と称される仏教系の呪術師がいたり、巫女などの民間信仰においても仏教的要素が強く取り込まれている。

村祭りや忌祭において、両班村などでは儒教式の祝文を読み上げることはあるが、相手は、城隍神や

8) 韓国仏教について岡田弘樹（1999：50-53）および、最近の状況については、氏のメールによる教示にもとづく。

祖霊など特定の神霊に限定され、きわめて整理された簡素な内容であり、神々の名前を羅列するようなことはない。多神的な内容は、シャーマンの祈祷に表れても、仏教行事において、ベトナムの疏文に相当するような文書を読み上げることはない。末成（1982, 1985）

——知識人の間では、仏教は世界宗教の一つであり、普遍性を持った高級宗教であるという認識があり、その教義に興味を抱く者も居る。仏教に関心をもつ知識青年が挙げた仏式結婚式や、外国で交通事故のため跡取り息子を亡くした父親が近くの山中にある寺で、忌祭を行ったに参加したことがあるが、これらは極めて例外的なものである。

6.3 中国、台湾漢族との対比

「村の寺」は、存在しない。村に必ず寺が存在することもないし、存在していても、村人全部がその寺の信徒とは限らない点で、ベトナム、日本と対照をなす。寺だけでなく、廟も必ずしも村単位でない場合が少なくない。

寺には、通常僧侶、ないし尼僧が居住しているが、葬式は、主に有髪妻帯の在家専門家⁹⁾などと称される¹⁰⁾が、死後埋葬に至る一連の行事を担当する¹⁰⁾。

寺院の祭壇には、主に仏教系の像が置かれているが、非仏教系の神像を別棟などに祀る例もある。

疏文は、ベトナムと同様、多伎にわたり、葬礼においても一連の疏文が用いられる。

仏教の改革運動は、台湾では、高学歴化と都市への人口集中に伴い仏教への関心が強まるなか、マスコミヤ、大集会方式を取った新しいかたちでも行われている¹¹⁾。

◆ 台湾（西湖郷）との比較

むらに寺が無いが、有っても村人がこぞって参拝するというより、ごく一部の信者が通って村外の信者と共に参拝する。五湖においても、尼寺が山手の廟に隣接して建てられているが、殆どの村人は立ち寄ったことさえ無く、とくに仏教に関心をもつ者が、気が向いたとき訪れるといった感じで、参拝客で賑わう廟と対照的であった。

◆ 中国大陆との比較

「村寺」という意識は希薄で、信徒個人と寺の関係により成り立っていて、村外からも信徒も村内の信徒と区別されることはない。寺の住持で妻帯者は居ないものとされている。ただし、文化大革命の時に妻帯を強制された事例は広東省梅県で聞いたが、韓国の場合のように一般的ではない。

中国においても、仏教寺院に非仏教系神明を祭壇に祀る例は、銭丹霞（2007）の付録資料を見てもわかるように、中国、浙江省象山区の寺22例中非仏教系の神霊像を置いているのが10例と、現在でもかな

9) 北部台湾では、「做齋仔」、「做和尚」などと称される。末成（1894）参照。

10) これは、死に関して強い穢れの観念を有する台湾、福建、広東など華南の場合で、ほかの地域については未確認。

11) 例えば、台湾苗栗県の客家村落の調査中、村の近くの丘で一人のリーダーによる座禅集会が開かれた。ベトナム出身の女性で、北京語により百人を超える各地からの参会者に問答形式の講演を行っていた。台湾以外に、アメリカ、日本、香港西部を持ち、定期パンフレットを刊行している。

り存在する。しかし、清福の洪福寺の本堂の祭壇のように多様な例は無く、また、中央に祀られるのは稀で脇または、別の祠に祀られるものが多い。関公、財神、南曹北斗が多いが、玉皇上帝が祀られている例は無い。

東アジア諸社会との比較から解るのは、清福の事例が、単独の孤立したものではなく、それぞれの社会においても、共通の次元で考察に価するということである。村寺の存在については、日本との著しい共通性と韓、中との対照的な差異が認められる。伝統的な祭壇における多神性は、それぞれの社会において階層や時代を異にはするものの共通の現象である。妻帯僧の存在は、正式の僧侶として認める日本を一方の極にして、それを認めない他社会を他の極として対置しうるものの、実際にはその中間に疑似僧的な宗教専門家が居て、仏教的な役割を果たしている。こうした、広義の仏教に対して、仏教の教理から整理、改革をする動きも、それぞれの社会において近代化、現代化の過程で現れていることが明らかになった。

7. 結論

清福の洪福寺の事例が注目されるのは、中部ベトナムの伝統的な特色をかなり保存しているだけでなく、その多様性を仏教教理にしたがって克服しようとした佛教教会側の改革の働きかけに完全に飲み込まれることなく微妙なバランスの上に過去と現在を接合させている点にある。

このバランスは、刻々変わっていく社会生活の中で、固定されているわけではないので信仰屋儀礼活動も変化の相において見る必要がある。ここで結論として静態的な特徴について述べるのではなく、現在の村社会のなかの信仰活動にどのような方向性が認められるかを指摘して将来の展望としたい。

ベトナムの近來の経済発展、世界市場経済の浸透は、南北の大都市サイゴン、ハノイより遙かに遅れながら、中部ベトナムでも波及してきており、農村にもその影響が経済格差の拡大となって現われ、信仰面においても階層による方向の差が顕著になっている。

経済発展についてゆけず、その恩恵に与れない下層は、かつての貧しさのもとでの平等という安定感も失い、逆境に陥った不満や不安から、信仰に救済を求めるが、金のかかる外部の専門家（正式の僧侶、道士）を呼ぶ余裕がなく、敢えて外見を飾る必要もないので、村内のタイクンによる旧来の儀式に頼る。聖母道は、不連続きの原因究明には利用しても、自ら入信してハウを行うのは、金と暇がかかりすぎる。病気治療などもタイクンに頼らざるをえない。

村の農民の多くを占める中間層は、ある程度の収入増加により余裕ができると、三間の正面にある祭壇を立派なものにし、最も重要な儀礼である葬式は、正式の僧侶を外から招き盛大な儀式を行う。忌祭は余裕がなければ、タイクンを呼んですませるか、専門家を呼ばず自家のみで行う。熱心な仏教信者は、毎日の礼拝、読経を行ったり、精進料理の日を守ったりする。これらは、新式の色合いがよい。しかし、旧来の儀礼と縁が切れた訳ではない。家の改築コンクリート2階建て建築が増えているが、その際の材料のお祓いや上棟式などの建築儀礼は大切である。ただ、病気治療は社会保険制度の導入により、

最初から西洋医へゆくことが容易になっている。

事業を手がける上層は、財神に繁盛を願うのは当然、忘年会（畢年）、店開き（開帳）、土地神への祈願（供土）などの年中行事や事業の成功を墓に感謝する謝墓を盛大にやることは、神に対してだけでなく、従業員をはじめ、知己へのPRとしても欠かせない。

交通事故の鎮魂、あるいは、予防のための車のお祓い。さらに村外からの依頼であるが顕職にある幹部の身分の安泰を、その夫人が願うなどの聖母道への需要も衰えることはない。

経済発展、近代化が、必ずしも、旧式仏教や、それと関連する、ベトナム道教あるいは聖母道など伝統宗教やそれらを取り入れた旧式仏教の衰退と新式仏教の浸透をもたらすとは限らないことが推測される。

参考文献

Hoang Trong So (Thich Nguyen Tam)

2000 *Contemporary Buddhism in Vietnam: A Focus on th Hue Area* (愛知学院大学博士論文)

岡田浩樹

1999 「沈黙する多数派——韓国仏教の「過去」に関する試論」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所研究報告『東アジアにおける文化の多中心性』45-83頁

大西和彦

(n.d.) 「ベトナム仏教とその現状」

銭丹霞

2007 『中国江南農村野上・鬼・祖先：浙江省尼寺の人類学的研究』風響社

末成道男

1982 「東埔の村と祭——韓国漁村調査報告」『聖心女子大学論叢』59集：123-218頁。

1985a 「東埔の祖先祭祀——韓国漁村調査報告」『聖心女子大学論叢』65集：5-96頁。

1985b 「村廟と村境」『文化人類学』：255-260

1993 「功德 儀礼の二つの型」『東洋文化研究所紀要』116：1-60

